関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

武市先生のこと

その他のタイトル	Danksagung an Prof. Osamu Takeichi
著者	工藤 康弘
雑誌名	独逸文学
巻	59
ページ	9-11
発行年	2015-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017954

関西大学『独逸文学』第59号 2015年3月

武市先生のこと

工藤　康弘

武市先生との出会いは1991年、京都で開かれた語学ゼミナールにおいてであった。私自身はこのときの記憶はほとんどないのであるが、そのときの招待講師 Hans-Werner Eroms 氏との出会いが、その後の武市先生の研究活動に大きな影響を与えている。先生が海外の学術雑誌に多く寄稿しておられるのも、上のような縁によるものであろう。私事になるが、私は1990年に山口大学から三重大学へ移り、関西大学に移る2004年まで三重県に住みながら、毎週土曜日に京都、大阪、名古屋の研究会に出向いていた。その大阪の研究会を主宰していたのが武市先生である。

先生の研究活動のいわば力のもととなっているのが、石川敬三氏主宰の研究会であった。私が仰ぎ見るような先生たちがそこに通っていた。大変厳しい道場であったらしい。私の知る偉い先生も、研究会が近づくとそわそわし、自分が担当する箇所がうまく訳せないと言っては煩悶していた。平たく言えばびびっていた。「わかりません」と言えない研究会とはどんなものだったのだろうか。ともあれ武市先生はその一員であった。推測するに先生は師範代くらいの立場にあったのではないだろうか。その武市先生が自ら主宰する研究会に私が通うことになった。その頃は『イーヴァイン』と『トリスタン』を読んでいた。当時私は、京都の研究会でゴート語と古高ドイツ語、大阪で中高ドイツ語、名古屋で初期新高ドイツ語と、ドイツ語史のフルコースを味わっていたのだが、なかでも中高ドイツ語は語史研究の基点となる領域である。それを武市先生のもとで学べたのは幸いであった。先生を通じて石川道場のおこぼれをいただいていたことになる。武市先生の読みは一言で言えば厳密である。徹底して辞書を読みこなし、誰もが納得のいく説明をされる。メンバー全員が分担して訳していくのであるが、ともすれば自分の担当箇所以外は手を緩めてしまい、読みが浅くなる。難解な箇所にぶつかるたび、最後の決め手は武市先生の解釈である。先生は手抜きという言葉とは無

縁のようである。

さて、時を経て私は武市先生の同僚になった。同僚とは難しいもので、近すぎて気恥ずかしさがあるのか、えてして学問の話よりも学内行政や授業の話をしがちである。学問的には二人とも古いドイツ語を丹念に読みこなし、解釈することを無類の喜びとしている点で共通している。しかし研究の現場で何をしているかとなるとまったく異なる。武市先生は韻律論のスペシャリストであり、私などはその論文の内容になかなかついていけず、恐れ入りましたとしか言いようがない。むしろ素人的な興味から、いろいろお聞きしたかったことがある。たとえば1200年前後のドイツの政治状況、社会・文化、その頃の神聖ローマ帝国、フリードリヒ１世（バルバロッサ)、フリードリヒ２世、吟遊詩人たちはどういう人たちで、どういう生活を送っていたか、彼らはニーベルンゲンやトリスタンの一部だけを取り出して殿様の前で歌っていたのか、取り出すとしたらどの部分か、伴奏に使った楽器にはどういうものがあったか、華やかな宮廷文学がなぜこの短い時期に集中しているのか、その際にホーエンシュタウフェン朝が特別な役割を果たしていたのか、当時民衆の文学活動はまったくなかったのか等々、雑談の中でもっとお聞きし、引き出していればよかったと後悔している。いつか武市先生にはこうしたことについてエッセー風の軽い啓蒙書を書いていただけたらなと思っている（先生は軽いものは書かれないかもしれないが)。

それでは酒の席では何の話をしていたのかというと、宮廷文学は出てこない。他の年輩の先生方との間に花咲くテーマはむしろ学内政治、しかも私が赴任する前のことが多く、私の知らない人物が私の頭上を飛び交う。よほどいろいろなことがあったのかなと、政治能力ゼロの私はその政治談議を眺めているほかなかった。

武市先生は私を称してまじめだとおっしゃる。皮肉な意味では一部当たっている。私は愚直なまでに非効率的な行動をとる。電話で済ませればいいものを、わざわざ事務室に出向いていって顔を合わせて伝える。数百名を相手にするリレー講義のコーディネーターを務めたとき、毎回教室を見回りにいき、私語をする学生たちとバトルを繰り広げていたことがあった。そんな私を見て武市先生は、そんなことをしてもむなしいだけだ、研究活動にもマイナスになるとおっしゃった。二度目のコーデ

ィネーターを務めている今、教室の見回りはしなくなっている。武市先生はこの点、手の抜き方を心得ておられる（ただし学問は別）。それを助けているのが、先生の人脈作りのうまさであろう。これによって、先生のために動いてくれる人がたくさんいるのである。

武市先生はテニス好きのスポーツマンだが、体育会系の雰囲気は嫌っておられるようである。不正には怒るが、総じてやさしい。大昔スポーツをやっていたが、今は気持ちだけ体育会系の私とは正反対である。そういえば60年代の学生運動の話もなさらない。たまたま経験されなかったのかもしれないが。テニスと並んでもう一つ得意なものがあった。カラオケである。いつも私が「前座」で歌ったあと、武市先生は「真打ち」で登場し、美声を響かせ、まわりをうならせる。隠れて練習しておられるのか、レパートリーは広い。ただしジャンルは演歌に限る。これは今でも不思議でならない。若いとき洋楽に熱中したことはないのだろうか。しょうもないことにこだわって恐縮だが、シャンソン（あるいはフレンチポップス）歌手シルヴィ・ヴァルタン、フランソワーズ・アルディ、フランス・ギャル、カンツォーネのジリオラ・チンクェッティなどはみな武市先生とほぼ同世代である。ビートルズ来日とグループサウンズ全盛期を先生は20代前半で経験している（はずである）。こうしたことが先生の口から出てこないのが不思議でならない。まあ謎は謎としてとっておこう。

武市先生と、ここでは取り上げなかった八亀先生が同時に職を引かれると、酒を酌み交わす人がほとんどいなくなってしまう。望むらくはこれからもときには相手をしていただき、ご意見番としてアドバイスをいただきたい。その際はもう学内政治から離れて、語学談議、文学談議に花を咲かせたいと思う。